

7. N-Isopropyl-[¹²³I]p-Iodoamphetamine
による局所脳血流量の測定

土屋 俊明・伊藤 寿介 (新潟大学歯学部
歯科放射線科)
小田野幾雄・酒井 邦夫 (新潟大学
放射線科)

SPECT による CBF イメージング用薬剤として開発された N-Isopropyl-p-[¹²³I]-Iodoamphetamine を用いた rCBF 定量測定を試みたので報告した。

Kuhl 等の方法に順じて、対向 2 門回転型ガンマカメラを使用し、成人男性ボランティア 4 名 (23~27 才) に対し測定を行った。

mean CBF は 49.5±4.7ml/100g brain/min ととなり、rCBF は cbl. cortex 47.0±5.2, frontal cortex 54.0±3.7, temporal cortex 51.7±3.6, visual cortex 49.4±2.5, parietal cortex 44.8±2.1 であり、frontal dominant の傾向を示した。

8. 非機能性副腎腫瘍の画像診断

酒井 達也・木村 元政 (新潟大学)
椎名 真・原 敬治 (新潟大学放射線科)
酒井 邦夫
秋田 眞一 (厚生連中央総合
病院放射線科)

内分泌活性を呈さぬ副腎後腹膜部の腫瘍性病変の画像診断は、CT、超音波の進歩普及した今日尚困難である。病理学的結論の得られた 5 例について検討を加えた。(1) 24 才男性、後腹膜神経節性神経腫 (2) 56 才女性、右副腎リンパ管腫 (3) 51 才女性、左副腎骨髓脂肪腫 (4) 66 才男性、左傍副腎神経節腫 (5) 27 才女性、右腎細胞癌。いずれも原発巣をめぐり腎、副腎、後腹膜の局在診断が困難であった。CT 画像で腫瘍と隣接した臓器の変形所見は診断根拠となり得ず、又、血管造影で同定された腫瘍の主要養動脈が原発臓器の固有動脈であるとは限らなかった。しかし腎上極部腫瘍と副腎腫瘍との鑑別に、腎動脈分枝の分布の有無や ¹³¹I アドステロールシンチグラムの解析が役立つ症例がある事が示唆された。

9. 結果的に膀胱炎であった膀胱腫瘍性病変

石川 忍・佐藤 俊郎 (長岡赤十字病院)
遠藤 次彦・川村 正 (内科)

膀胱癌を否定しきれず手術を施行し、結果的に膀胱炎であった 4 例と、膀胱癌切除例 5 例の画像診断上の問題点について検討した。その結果、ERCP の所見を詳細に検討することで膀胱癌と膀胱炎の鑑別は多くの例で可能であ

た。US では境界明瞭な低エコー腫瘍と尾側尿管の拡張を認めれば膀胱癌の可能性が高いが明瞭な腫瘍像が得られない場合は鑑別がむずかかった。ルーチンの enhanced CT では腫瘍が小さい場合は癌でもはっきりした低濃度腫瘍を示さず膀胱炎との鑑別はむずかかった。腹腔動脈及び上腸間膜動脈造影によるルーチンの血管撮影では膀胱内動脈を明瞭に造影することができず小膀胱癌と膀胱炎の鑑別はむずかかった。以上の画像診断によっても鑑別困難な例があり、それらは臨床経過を加味して経過観察するか、あるいは手術もやむを得ないと思われた。

10. 胆石溶解療法の適応決定における CT の有用性について

大貫 啓三・尾崎 俊彦 (新潟大学)
島山 重秋・市田 文弘 (第 3 内科)
長谷川 滋・川口 英弘 (同 第 1 外科)
吉田 奎介
椎名 真・原 敬治 (同 放射線科)
新妻 伸二 (新潟県立ガンセ
ンター放射線科)

胆石溶解療法の適応決定における CT の有用性について検討し、以下の結論を得た。

1. 実験および臨床成績より、通常の X 線撮影法で胆石の石灰化が不明な場合でも、胆石のカルシウム含有量が 1% 以上存在すれば、CT で胆石の石灰化を検出できた。
2. 胆石溶解療法が有効な症例では、全例 CT でも石灰化を検出できず、また CT で石灰化が検出された症例では、全例胆石溶解療法が無効であった。
3. CT で石灰化のみられる胆石は、通常の X 線撮影法で X 線透過性胆石であっても、胆石溶解療法の適応から除外できる。
4. CT を適応決定に応用することで、従来の適応基準により症例を選択した場合より、胆石溶解療法の有効率を 2 倍に高めることができた。

11. 超音波検査法による肝癌検診

尾崎 俊彦・広瀬 慎一 (新潟大学)
大野 隆史・原 秀範 (第 3 内科)
西川 温博・岸 裕
青柳 豊・吉川 明
上村 朝輝・市田 文弘

(目的) B 型肝炎ウイルスの疫学調査を継続している地区での肝癌検診の 6 年間の結果を集計すると共に検診の問題点について検討した。

(方法) HBs 抗原保有率が約 9% と高率である佐渡郡 I 地区の住民を対象に HBs 抗原・抗体、AFP、肝機能

検査を施行し、肝癌の High risk group を中心に US を併用した。

(結果) 延べ924名に US を施行し、原発性肝癌 3 例 (0.3%)、転移性肝癌 1 例 (0.1%)、肝血管腫 5 例 (0.5%)、肝嚢胞13例 (1.4%) 計22例の限局性肝疾患が発見された。原発性肝癌 3 例中 1 例は US で見落したが AFP は全例陽性 (234~22,000ng/ml) であった。又 US では肝血管腫 4 例中 2 例を肝癌と誤診した。原発性肝癌 3 例中 2 例は 3cm 未満の小肝癌で肝切除術が施行された。

(結論) 肝癌の集検 US と AFP を併用した結果、原発性肝癌の発見率は0.3% (3/924) であった。現在、我々は50才以上の男性で HBs 抗原性の肝機能異常者を住民から1次スクリーニングして、USとAFPを併用している。

12. CT 上、上咽頭に腫瘤形成を認めた
白血病と神経芽細胞腫

横山 道夫・黒川 茂樹 (新潟市民病院
放射線科)
前田 春男
高野美紀子 (同 小児科)
村松公美子 (同 内科)

症例1. 急性リンパ性白血病の経過中に上咽頭及び鼻腔に急速に腫瘤を形成し、呼吸困難をきたした27才の女性。

症例2. 腹部神経芽細胞腫の術後に上咽頭附近に転移をきたし、呼吸困難と鼻出血がみられた9才の男性。

以上の2症例についてCT像を中心にのべるとともに、いずれの症例にも放射線治療の効果が著明であったことを報告した。

また、若干の文献的考察を加えた。

13. 高安動脈炎における DSA の有用性について

捧 彰・木村 元政 (新潟大学)
酒井 邦夫 (放射線科)

intavenous digital subtraction angiography (DSA) の施行されている18例の大動脈炎症候群症例について検討した。外来で施行できる DSA 検査は、大動脈炎症候群のスクリーニング、経過観察として有用である。又、大動脈炎症候群確定診断のため必要とされる大動脈造影の役割りを DSA は十分に果たすものと考えられる。

特 別 講 演

「NMR の画像診断」

東京大学医学部 放射線医学教室教授
飯尾 正宏 先生